

「魚染の滝」

飛瀑（ひばく）を上げる滝の下の水面に魚の影が映えるところから、魚染の滝と名付けられた。

桂沢の山間を抜けて小さな盆地に出た旧幾春別川は、幾春別神社の丘陵前から大きく北に曲がり、山すそに沿って幾春別千住町の突き出したがけにぶつかり、南下しながら大きく蛇行して流れていた。

明治18年に開坑した幾春別炭鉱は、移民の半農半鉱のための借地の開発と、幌内太（旧三笠駅）からの鉄道の延長や炭鉱の用地や市街地の造成拡大のため、川の切り替え工事に着手した。

がけを鉱業用のダイナマイトで崩し、手掘りでの原始的な工事の最中、一夕の大雨に増水した川は作業半ばのせきを破って落下し、およそ10m余の滝を一挙に出現させて、下流と直線で結ばれた。（古文書には明治21年10月に切替工事完了とある）

同年の4月には四国の阿波から50戸、翌年

には70戸、さらに熊本から140戸が移住し、幾春別は住宅地として広がった。

明治の後半には奔別炭鉱の馬鉄軌道が駅前道路を走り、当時の幾春別市街地には百余の戸数が軒を並べたという。

この時残された大きな古川の沼に木々を植え、棧橋などを据えて遊園池が造られた。昭和初期の写真には、男性は当時モダンな麦わらのカンカン帽に、女性はパラソルに着物で、乗ったボートには「みかさ」の名も見える。遊園池は経営者の名を取って石渡（いしわた）の沼とも呼ばれ、産卵期には他の小さな沼や下水などにも鮒（ふな）が群がり、家の中から魚釣りができたそうである。

この古川の沼、昭和22年の幾春別大火の後に埋め立てられてグラウンドとなり、昭和35年には奔別立坑が建てられた。

魚染の滝にまつわる伝説も幾つかあるが、滝の上（現在の幾春別滝見町）、中の島（現在の幾春別中島町）などの地名が残された。

